

		※ ※ ※		
		<h1 style="text-align: center;">特 集</h1> <h1 style="text-align: center;">年 頭 所 感</h1>		
<small>あ</small> 財団法人日本漢方医学研究所 漢方友の会		※ ※ ※		
Vol.53	1	月号		
No.1				
2011年				

新年挨拶

(財)日本漢方医学研究所理事長

石野尚吾

謹賀新年

平成23年年頭にあって財団法人日本漢方医学研究所理事長として、謹んで新年のお慶びを申し上げます。

平成21年6月に理事長を拝命して、今年で3年目を迎えるにあたり、平成22年度を振り返り、新しい年の展望と抱負を申し述べさせていただきます。

一般法人への移行について

本財団は昭和47年に設立以来、漢方医学の伝統を保持し、普及、発展、啓蒙を目的とする公益法人としての責務を遂行して参りました。現在、進められている民法制度改革により、平成25年11月30日までに新制度のもとで一般法人か公益法人のどちらにかに移行しなければなりません。

理事会で検討し一般法人への移行を選択、決定いたしました。

平成23年度中の申請を目標にして鋭意作業中であります。

漢方医学講座について

本財団設立の主旨により、医師、薬剤師を対象とした漢方医学講座（基礎講座、臨床講座）、一般大衆向けの市民公開講座を開催してきました。

平成22年度、23年度2カ年間の漢方医学基礎講座は「傷寒論の基礎と臨床」のテーマで行っています。講師の足立秀樹先生が傷寒論に関して、昭和に活躍した漢方大家の各々の論説を紹介し、伊藤隆先生と森由雄先生が臨床応用による処方解説を行っています。

臨床医学講座は実地医家の先生方を対象として、平成23年度、1年間に5回、5月、7月、9月、11月の日曜日に行います。テーマは肝機能障害、睡眠障害、更年期障害、痛み、めまい、です。本財団としては初めての試みではありますが、1日のプログラムとして各テーマ毎に現代医学の専門医による現代医学的解説と漢方専門医・指導医による漢方医学臨床解説、次に薬学の立場から各テーマに関連深い生薬の解説を行います。最終回には前記に加えて腹診実習を行う計画をしていま

漢方の生薬資源問題

慶應義塾大学医学部漢方医学センター

渡辺賢治

平成21年の事業仕分けが一段落したと思ったら、平成22年はCOP10で生薬がクローズアップされ、7月にNHKのおはよう日本で生薬の資源問題が取り上げられた。ここ数年の生薬の価格高騰は目を見張るものがあり、ある会社からは「日本に入るうちはまだいいですよ」と言われた。生薬がなくなれば漢方は存在しえない。これは敬節先生が昭和54年に残した言葉である。まさにそれが現実味をもって感じられる今日この頃である。また、生薬の質が低下すれば必然的に医療の質が低下する。

問題は生薬供給源が中国に依存していることにある。中国の経済発展に伴う人件費高騰に加え、干ばつ・地震などの自然災害のために価格が高騰している。

レアアースの例に見られるように、いつ政治的に利用されるかも分からない。こうした状況で、漢方の将来像を描くのはなかなか難しい。生薬栽培に関心のある地域がたくさんあることは非常に喜ばしいが、末端価格が薬価で縛られているために、生薬栽培を推進しようにもなかなか地域が乗ってこれない。

現場の漢方医は生薬一味一味の重要さをいやというほど知っている。いい生薬が国内でもきちんと確保できるような体制作りを一日も早く望みたい。

年頭所感

『活』編集委員長

足立秀樹

明けまして おめでとうございます 本年も『活』を宜しく願い申し上げます

去年(2010年)の年頭所感では、その前年(2009年)を「変化」の年と総括しました。その象徴は「政権交代」でした。生き生きとした新時代の到来を期待されていた2010年は、どういう年だったでしょう。色々と考えてみましたが「迷走」の年といえるような気がします。その象徴は「普天間」と「尖閣列島」でした。

まあ、ゆっくり前に向かって歩いてゆくしか方法はないのでしょうか。そんなに簡単に「生き生きとした新時代」が向こうからやって来るはずもないのですから。

この数年、日本漢方の用語の体系を作ろうとして作業を続けてきました。そんな中で中国や韓国とは違う日本の特殊性を感じる必要があります。『方証相對』をはじめとした日本のやり方は臨床的には非常に便利な方法といえます。また日本漢方では五臓という概念も殆ど利用しません。脈診は割合におおざっぱなのに対して、腹証という所見を重要視し、『傷寒論』と症状分析に基づく経験則を加えることで、五臓という概念を使用しないでも処方までいきついてしまうのです。中国や韓国のような「昔の先進国」からは理解しがたいことでしょう。

でも日本漢方からは「昔の後進国」だった日本の若々しい息吹を感じることができません。漢字という外国語を受け入れたときの生身の日本人の抵抗感が「万葉集」や「万葉仮名」を生み、ついには「平仮名」を生んだような感覚です。レヴィ・ストロース風に云え